

## 木に注ぐ愛情と 仕事にかける情熱が 人吉家具の技を守った



上原家具木工所  
う え は ら ま さ あ き  
**上原正昭さん**

一九二七年 球磨郡五木村生まれ  
一九四八年 人吉市の家具店に修業に入る  
一九五四年 上原家具木工所を創る  
一九七九年 熊本県伝統的工芸品指定

無垢の板を素材に、クギを使わない独特の技法を駆使して作られる人吉家具。木目の美しさとし生ものの丈夫さに、県内外の愛好家から注文が絶えませんが、五十年近い家具作りを「好きな仕事を続けられたことは、金に代えられない満足」と語る人吉市の上原正昭さんに、お話を聞きました。

### 雨の多さが球磨・人吉の銘木を生んだ

「これはケヤキ、こつちはキリ。表面に樹脂が出てきて黒ずんでますが、一枚削ればきれいになる。この木目は玉目。ほら、ブドウ目というものもあります。こういう木目が出るのは、何万本に一本ですかね」

作業場に所せましと置かれた大きささまさまの無垢の一枚板。家具作りは素材選びが肝心です。なじみの木材店から「いい木が入った」との連絡で仕入れると、少なくとも四、五年は乾燥。雨ざらし日ざらしや、種類によっては水に漬けて樹脂を抜いたり。すると木は水分を吸ったり吐いたりを繰り返して組織がしまり、「あばれ」が取れて後でくるといが出てくるのです。

球磨・人吉地方は、古くから森林資源の宝庫で林業がさかん。切り出された木材は、いかだに組んで球磨川を下り、人吉や八代へと運ばれました。

「昔から木は雨の多いところほど質がいいと言いますね。市房山系の木もそういった気候に恵まれて、ね

ばりと弾力性のある銘木が多く取れた。それに、この地方は交通網の発達も遅かったので、建築の際の内装や家具作りも全て地元業者がするのが当たり前。それで木工芸が発達したんでしょう」

### 機械化が難しい人吉家具の工法

実家が五木村の農家だった上原さんは、第二次大戦後、兄の復員にもなつて仕事を探し、出合ったのが人吉家具でした。店頭の商品の木目の美しさにひかれ、人吉市内の家具店に弟子入り。「おそろく私が徒弟制度の最後の人間」という修業を経て職業訓練校にも通い、六年後に独立しました。

家具作りは、家具の部分に応じて

板から切り出す「木取り」に始まって、削り加工、墨付け、切り込み、組み立て、引き出し・戸作り、ペーパーかけ、塗り、金具付けまで。上原さんはこれを一人でこなします。漆がけだけでも十回以上施すという手間ですが、いったん制作に入ったら、たんす一さおが一月から一月半で仕上がるのか。

中でも人吉家具の特徴となっているのが、剣留め工法。これは四十五度の角度に加工した板の凸部を、やはり同じく加工したもう一方の板の凹部と組んで接着剤でつなぐ工法で、クギは一本も使わないのに強度があつて、デザイン的にも美しい造りになります。

「この工法は機械化が難しく、素材も無垢板じゃないとダメなんです」と上原さん。ほかにも蟻組みやあられ組み、装飾として枠でかこんだ覆輪巻きなど、熟練の技法が次々と飛び出します。

### 好きな仕事を続けてよかった

昔ながらの職人技を守る人吉家具は、高度成長期に入るとコスト高を理由に合板の大量生産品に押されるようになりまし。同業者が減る中で上原さんは注文生産に切り替え、やがて時代が本物の造りのよさを見直すとともに、全国から依頼が来るようになりまし。木から選んで制作過程を楽しむ愛好家。「展示会で

見て以来ずっと欲しかった」と両親を連れて婚嫁家具を求めに来る若い女性。上原さんのもとには幅広いお客が訪れます。

現在、上原さんが参加する人吉木匠会では、伝統工芸品の指定を受けた人吉家具、挽物、表具師など七人の会員が、互いに技術や情報の交換を行い、その中から次世代の後継者も育っています。

かつて、多くの同業者や上原さんのもとにいた職人が大手家具メーカーの引き抜きにあり、上原さん自身にも誘いがかかりました。

「大手に行けば、給料はよくても材料や手間の制約があつて自分の思うような仕事はできんし、自身の技術も中途半端になつたでしょう。厳しかときもあつたけど、好きな仕事を続けてきてよかったと満足しています」上原さんは穏やかな笑顔で語り終えてくれました。



素材となる木はケヤキ、クワ、チシャノキ、シオジなど多彩



一枚の板から家具の部品を切り出す作業「木取り」



美しい木目に出会うのは難しい



自ら作ったものも含め、作業場にはカンナ、ノコ、ノミなど百種類ほどの道具がきちんと整頓されている



強度と美しさと両方を備えた剣留め